

---

# 天国に一番近い場所

月野真昼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天国に一番近い場所

### 【Nコード】

N0475B

### 【作者名】

月野真昼

### 【あらすじ】

現実の世界と別の世界が混在している主人公のおはなしです。わかりにくいという声を受け少しずつ手直ししています。

「おい、聞いたかよ。またあの空き地で人が死んでいたらしいぜ。」  
「ああ、聞いた聞いた。今年に入ってからもう5人目だ。」

いつもなら他愛も無い世間話に興じているクラスメイトもこの日は違っていた。

「気味が悪いよなあ・・・。」

「だよなあ、変死体だぜこえーよな。」

もっぱら今日の会話は最近立て続けに起こっている空き地での変死事件である。

その空き地というのは数年前までは大きなビルが建っていて、マンションやらオフィスとして貸し出していたビルだった。長年の不況のあおりによってビルの所有者は破産、ビルは取り壊され今に至っていた。

話題になっている空き地で死んだ者の死に様は妙で、まるで高いところから落ちるか、押しつぶされたような死に方をしていて、中にはショック死と判断される者もいた。

「でもよ、そのおかげで今週一週間は部活は無しってことらしいぜ。」

「マジか、よーし今週は遊びまくるぞー！」

「先生たちも見回りだつてさ。」

「うげ、ご苦労様だねえ・・・。」

うちらにとつて自分から遠い者の死なんて、話しのネタや興味半分の話しにしかならないだろう。またすぐに日常へと戻る。

授業中、窓から外を見る、視界に広がる景色の中に天を貫くようにそびえ立つビルが見える。のどかな町並みが広がっている周囲とはあまりに不釣り合いで不自然極まりなかった。だがその無機質なそのビルはあまりに不自然すぎて、まるで元々そこに存在するのが当

たり前のようにも見える。

学校での一日が終わったことをチャイムが告げる。その音色はあまりに間抜けていて、平和で日常そのものだった。また窓の外が気になって視線を向ける。あの建物はまるで塔のように見える。そして自分を呼んでいるようでもあった。

クラクラと眩暈の様な感覚に襲われる。そして呼ばれているような感覚も刻一刻と強くなっていく。幸い今日は何も予定が無く時間は十分にある。クラスメイトと別れた後、以前と同じようにその足をビルへと向けた。

ビルと学校とは直線で結ばれているかのような一本道だ。自転車のまたがり風を切る。

太陽が傾き始めるころには目の前を塔の足元が埋め尽くした。見上げるとガラスとコンクリートでできた飾り気も、温かみも感じられない建物と目が合う。

ビルの入り口を進みエントランスを抜け奥の非常口へと向かう。ドアノブを回すと大げさな金属音とともに扉が開く。

外へ出て非常階段へと進む。  
上を見上げるとソラにでも続いているかのような錯覚を覚える。  
この階段を昇ると天国へ行けるなんて噂が立つのも少しはわかる気がした。

目の前に映る階段を一步一步、上へ上へと登っていく。鉄と鉄とがぶつかり合うような音が一定のリズムで乱れることなく響く。一体どれほど上へ登っただろうか。ただひたすらに上へ上へと足を運ぶ。まるで何かの儀式のように続いている。

太陽が沈み始めた頃、やっとの思いで頂上にたどり着いた。周りには何も無いせいか、朱に染まる街を一望出来る。

美しい、と同時に恐ろしくなるような風景だった。全てが燃えているような、全てが血に染まっているような。世界が終わってしまうような、まさに絶景だった。

延々と階段を登って来たせいか、気がつくともシャツが汗でベトついている。しかし不思議と不快感はなく、むしろ心地よい疲労感で満たされる。フェンスに寄りかかり、胸のポケットからタバコを取り出す。風が強いため、火に苦労するが程なくして毒素が肺を満たす。

そして、世界が止まる。

時間が凍りつくまさにそんな錯覚におちいつていた。が、それはただの錯角であることを知っている。

と、その時誰かの視線を感じ、意識が鮮明になる。そしてタバコを消し携帯灰皿に入れる。

視線を入り口へとゆっくりと滑らせる。そこには、膝を付きながらこちらを見ている少女がいた。いつかどこかで出会った事があるような気がしたが、ここに来る人間なんてそんなものだ。大差などは持ち合わせてはいない。

「ここはドコなんでしょうか。」

見覚えのある少女が入り口に座り込みながら問いかけてきた。

一体何人に、そして一体何度答えてきたかわからない。ゆっくりと、そしてはつきりと答える。

「天国に一番近い場所さ。」

そう返せば間違いは無い。

この世なんてドコだって天国に続いている。ただここがほんの少しだけ死に近い場所であることを除いては。

ここは世界の狭間の世界、現実の中にある幻。

世界を拒絶した者同士、世界に拒絶された者同士が集まる場所。

これは、この世の何処にでもあり、何処にもない、天国に一番近い場所のお話。

(後書き)

初めてまともに書いたもので初投稿のものですが、はたしてまともといえるかは謎です。感想や意見などありましたら是非よろしくおねがいします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0475b/>

---

天国に一番近い場所

2010年10月9日00時37分発行